

令和 3 年 6 月 16 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K13841

研究課題名(和文) 災害文化の形成・継承・変質過程に関する社会学的研究

研究課題名(英文) Sociological research on the process of formation, inheritance, and transformation of disaster culture

研究代表者

定池 祐季 (Sadaike, Yuki)

東北大学・災害科学国際研究所・助教

研究者番号：40587424

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、様々なハザードに起因する災害事例の比較研究を通して、災害文化の形成・継承・変質過程に関わる理論的考察を深めることを目指して実施した。その結果、以下のことが明らかになった。

まず、各プロセスには災害の常襲性(頻度)・将来予測が影響を与えうることが明らかになった。「あの大災害」をどのように伝えるのか、恵みと災害を繰り返しもたらず自然にどう向き合っていくのかというテーマに向かう中で、個々の特徴があらわれていった。次に、他の被災地との交流などによって、双方の災害文化に影響を与えうることが明らかになった。また、行政と住民の追悼や伝承の姿勢やあり方が、これらと密接に関わっていることも確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、頻発する災害により多くの関心が集まっている災害伝承や教訓に関わることがらについて、「災害文化」という切り口でフィールドワークを通じた社会学的な視点による貢献を目指したものである。災害は個別性の高い事象であるが、継続的に個々の被災地に関わることや、また被災地間のつながりを丁寧にたどることを通して、一般性を見いだしつつ実践的であり、社会、特に被災地に貢献していく学問の萌芽もみられた。

研究成果の概要(英文)：This study is conducted with the aim of deepening theoretical considerations related to the formation, inheritance, and transformation processes of disaster culture through case studies of disaster-affected areas in various parts of Japan. As a result, the following three points become clear.

First, the processes of disaster culture may be affected by the regularity of disasters and future predictions. As the people in the affected areas face the theme of how to communicate "the catastrophe" and how to live with the nature that repeatedly brings blessings and disasters, the characteristics of each region will become apparent. Secondly, as one disaster-stricken area interacts with another disaster-stricken area, there is a possibility of influencing the disaster culture of both areas.

In addition, it is also confirmed that all of the above are closely related to how the government and residents of the affected areas mourn and pass on the stories of past disasters.

研究分野：災害社会学、地域社会学、防災教育

キーワード：災害文化 災害伝承 追悼行事 語り継ぎ 災害遺構

## 1. 研究開始当初の背景

本研究のキーワードである「災害文化（disaster culture）」は、ハリケーンの常襲地を対象とした実証研究を展開する Moore（1964）によって、アメリカ合衆国で提起された概念である。その後、日米の研究者の交流などを通して日本にもこの概念が伝えられ、事例研究も展開されていった。そして、阪神・淡路大震災（1995）を経て、新聞等で「災害文化」という用語が一般に使用されるようになっていった。

2011年に発生した東日本大震災では、継続的な防災教育などによって人々の命が守られた例が伝えられる一方で、過去の災害を伝える石碑などがあつたにもかかわらず、地域社会で伝承されていなかった例も指摘されている。そうしたことから、改めて防災教育や災害文化への注目が高まったが故に、多様な主体により「災害文化」が「伝承」「教訓」「防災文化」などとの区別なく使用されるようになり、「プラスチックワード」化が進んでいった側面が見られる。

申請者はこれまで、「災害文化」「防災教育」という切り口を通して、津波・噴火災害を中心に国内被災地の復興過程をたどってきた（定池 2009・2010 ほか）。本研究課題の申請時（2016年）も熊本地震や台風などにより、各地で被害が発生している。全国各地で様々な災害が発生する日本において、社会学や近接領域における災害文化論の整理を進めることは、学問的な貢献に加えて地域防災・減災活動や災害復興の一助となる可能性が高いと考えられるようになり、本研究課題の着想に至った。

## 2. 研究の目的

本研究は、様々なハザードに起因する災害事例の比較研究を通して、災害文化の形成・継承・変質過程に影響を与える要素を抽出し類型化を進め、災害文化に関する理論的考察を深めることを目指した。

具体的には、事例調査で取り上げる個々の災害やその被災地について、災害文化の形成・継承・形質過程をたどりながら、主に以下の3点に焦点を当てた。

- ①災害文化の共有される範囲：社会全体で共有される災害文化と、地域社会で共有される災害下位文化の形成・継承・変質過程の相違点について
- ②災害文化の形成・継承・変質過程に影響を与える要素：個々の被災地の中や、被災地間の交流等を通してそれぞれの災害文化に内発的／外発的変質をもたらす条件について
- ③災害文化の形成・継承・変質過程において災害文化が地域防災や災害対応・復旧・復興・生活再建に与える影響

これらに着目し整理を進めた上で、災害文化に関する理論的考察を試みた。

## 3. 研究の方法

本研究は、災害文化に関する文献研究と、国内各地の災害事例に関する現地調査（フィールドワーク）を軸に進めた。対象とした主なハザードは地震・津波・噴火災害であり、ハザードと災害名、フィールドワークを実施した地域は次ページ表1の通りである。

これらの地域において、災害そのものに関する文献調査や資料調査（特に新聞分析）とフィールドワークによって、災害文化の形成・継承・変質のプロセスと、2. 研究の目的で示した①～③の項目に着目して調査を行った。フィールドワークの中では、追悼行事や祭祀の他、記念行事（シンポジウム等）にも参加をした。なお、新型コロナウイルスの感染拡大により、参与観察を予定していた行事が中止になったり、訪問そのものを取りやめたりしたケースもあった。そのため、当初の予定通りの調査が実現できなかった地域もある。そのため、得られた調査結果を用いて、災害文化の形成・継承・変質過程において、災害文化が地域防災や災害対応・復旧・復興・生活再建に与える影響について理論的検討を試みた。

表1 本研究課題の中でフィールドワークを実施した地域

ハザード	災害名	対象地域	備考
地震	阪神・淡路大震災（1995年）	神戸市	
	新潟県中越地震（2004年）	新潟県中越地域 （長岡市ほか）	
	北海道胆振東部地震（2018年）	北海道厚真町・安平町・むかわ町	本研究課題開始後に発災し、支援活動の中でアクションリサーチを展開
津波	八重山地震（明和大津波・1771年）ほか	石垣島・宮古島	発生年不明の津波も含む
	北海道南西沖地震（1993年）	奥尻島	
	東日本大震災（2011年）	東北地方太平洋沿岸部	
噴火	有珠山噴火（2000年他）	有珠山周辺地域（洞爺湖町・壮瞥町・伊達市ほか）	

#### 4. 研究成果

本研究では、北海道奥尻島、有珠山周辺地域、東北地方太平洋沿岸部、新潟県中越地域、兵庫県神戸市、沖縄県宮古島・八重山地域等でのフィールドワークと文献調査を通して、地震・津波・噴火災害を中心に事例調査を実施した。その結果、次のような点が明らかになった。

（1）災害文化の形成・継承・変質過程には、災害の常襲性（頻度）・将来予測が影響を与えうること。

この中では、阪神・淡路大震災に代表される「あの災害」をどのように伝えるのかということを探求していく過程や、恵みと災害を繰り返しもたらず自然にどう向き合っていくのかというテーマに向き合っていく中で、各被災地における災害文化の特徴があらわれていった。

（2）他の被災地との交流などによって、双方の災害文化に影響を与えうること。

この中では、被災地から次の被災地に支援や教訓などの「バトン」を渡す例や、他地域の災害発生をきっかけに地域の災害伝承のアプローチを変える例が見られた。

（3）行政と住民の追悼や伝承の姿勢やあり方が、（1）（2）と密接に関わっていること。この中では、行政のみが主導する例はほぼ見られず、住民がどのような形で取り組んでいるか、住民が行政にどのように働きかけているか、それらが時間の経過と共にどのように変化しているかという点が、（1）（2）と相互に影響を与え合っていた。

さらに、本研究期間にも新たな災害が発生し、被災地支援に携わる中で、これら（1）～（3）の場面に直面することや、自身の経験や研究成果の発信を求められる機会があった。特に胆振東部地震（2018年）被災地の厚真町については、被災前から当該地域で防災教育に関わっていた経緯があることから、発災直後から本研究課題に関わりなく災害対応支援・被災者支援に携わっていた。その支援活動の中で、自ずとアクションリサーチを展開するようになり、行政や支援団体から本研究に関わる発信を求められる場面が少なからずあった。そのような経験からも、本研究課題に関わる内容は、被災地で必要とされている情報を含み、貢献できる可能性があると予想されることから、今後も学術的な発信と同時に、社会への発信も続けていく所存である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 定池祐季	4. 巻 13
2. 論文標題 河北新報に見る北海道南西沖地震に関する記事の変遷	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 震災学	6. 最初と最後の頁 127-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 定池祐季	4. 巻 35
2. 論文標題 北海道胆振東部地震に関する地方紙の内容分析：避難所と仮設住宅に注目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 寒地技術論文・報告集	6. 最初と最後の頁 209 - 212
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 定池祐季
2. 発表標題 地方紙における被災地報道の変化 - 北海道胆振東部地震に関する北海道新聞の報道から
3. 学会等名 日本災害情報学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 定池祐季
2. 発表標題 北海道胆振東部地震に関する地方紙の内容分析：避難所と仮設住宅に注目して
3. 学会等名 寒地技術シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 定池祐季
2. 発表標題 災害の「語り部」をめぐる変化 北海道奥尻町を事例として－
3. 学会等名 第42回（2018年）地域安全学会研究発表会（春季）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 定池祐季
2. 発表標題 新聞報道における「災害復旧」「災害復興」評価の変遷 北海道南西沖地震に関する河北新報の報道から
3. 学会等名 第37回自然災害学会学術講演会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 定池祐季
2. 発表標題 北海道南西沖地震から25年、奥尻島のこれまでと今－追悼行事と語り継ぎを中心に－
3. 学会等名 東北民俗の会10月例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 定池祐季
2. 発表標題 河北新報による他の津波被災地の切り取り方 奥尻島を例に－
3. 学会等名 日本災害復興学会分科会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 定池祐季
2. 発表標題 地方紙における被災地報道の変化 - 北海道南西沖地震に関する 北海道新聞の報道から -
3. 学会等名 日本災害情報学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 定池祐季
2. 発表標題 被災地における『災害遺構』の位置づけ-北海道奥尻島の事例から-
3. 学会等名 第38回(2017年度)地域安全学会研究発表会(春季)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 定池祐季
2. 発表標題 災害常襲地における防災教育の変遷 -北海道有珠山周辺地域を例に-
3. 学会等名 第18回日本安全教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 定池祐季
2. 発表標題 文化伝承と災害伝承の関連性に関する一考察-宮古島「ナーパイ」を例に-
3. 学会等名 第36回自然災害学会学術講演会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 定池祐季
2. 発表標題 奥尻島における災害語り継ぎ
3. 学会等名 日本災害復興学会神戸大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 定池祐季
2. 発表標題 北海道胆振東部地震における災害ボランティア
3. 学会等名 第48回（令和3年度）地域安全学会研究発表会（春季）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 定池祐季
2. 発表標題 北海道胆振東部地震に関する復興報道 - 北海道新聞の内容分析から -
3. 学会等名 日本災害復興学会2020年度遠隔大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 国際津波沿岸防災技術啓発事業組織委員会編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ウェイツ	5. 総ページ数 334
3. 書名 絆 津波からいのちを守るために	

〔産業財産権〕

〔その他〕

行政職員研修や一般向けの講演、被災地や支援者向けの情報提供の場面、メディア対応、雑誌等での一般向けの執筆に際して、本研究を通して得られた知見を用いた発信を行った。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------